イニシエーション無き時代の〝自分探し〟

白虎社熊野夏期舞踏＋芸能文化セミナー体験合宿

先月紹介したフィニッシングスクールをはじめ、自己開発セミナーや宗教など現在老いも若きも〝自分探し〟に奔走するのが一種の流行のようになっているが、今回紹介する舞踏グループ・白虎社主催の『白虎社熊野夏期舞踏＋芸能文化セミナー体験合宿』は、究極の〝自分探し〟と言っても過言でないかもしれない。

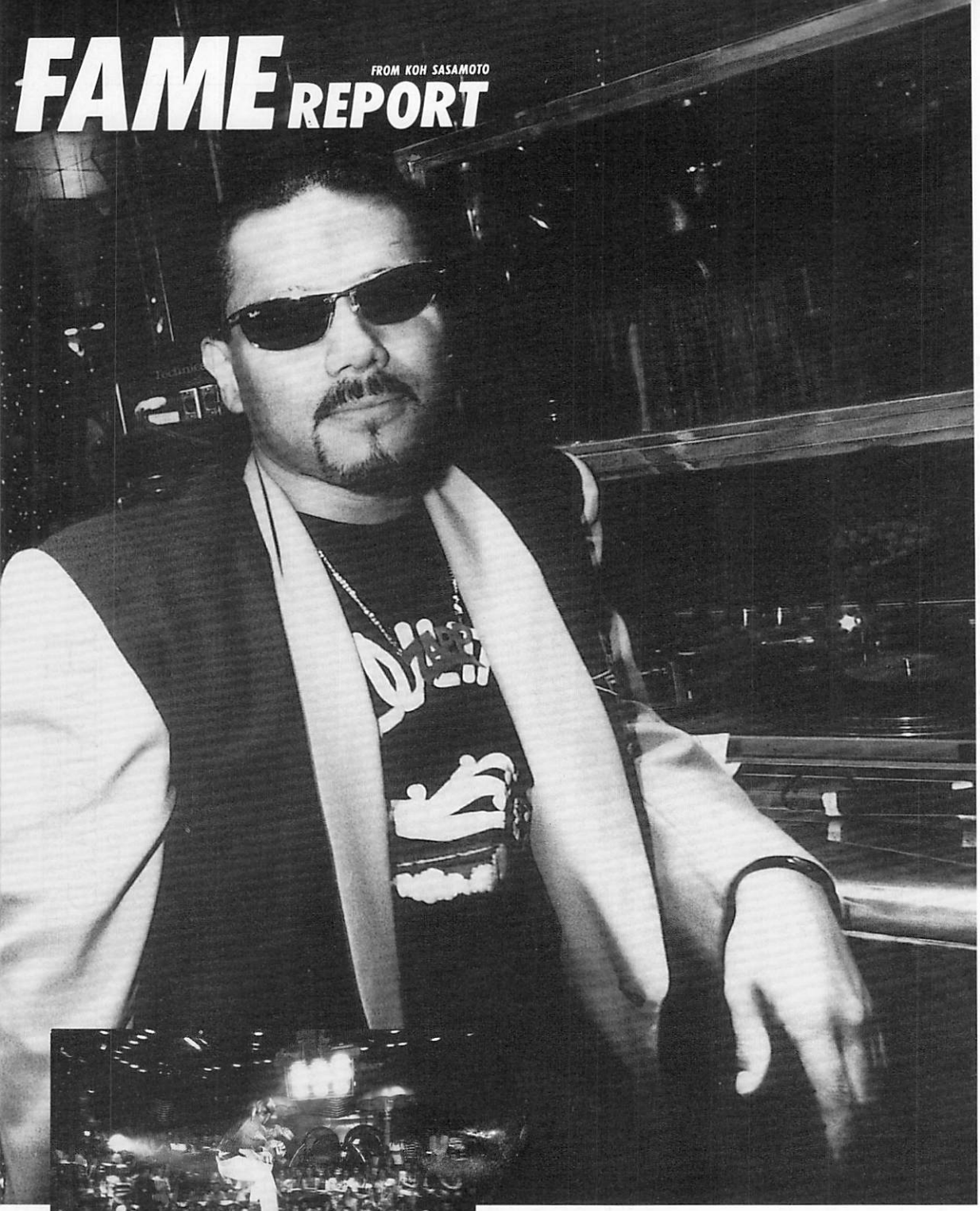
白虎社は1980年の結成以来、国内は勿論、東南アジア、ヨーロッパ、オーストラリアなどでの精力的な公演活動を通じて、日本的精神文化や美意識をアピールする芸術集団。その白虎社が夏期舞踏＋芸術文化セミナー体験合宿を小栗判官伝説と黒潮の地、熊野で開催し始めたのは今から11年前のこと。セミナーの地として何故、熊野を選んだのか？「熊野は目の前に黒潮の海、背後に古代の緑が欝蒼と繁る山といった自然に恵まれた場所。古くから神話の舞台として知られ、強烈な霊性を保ち続けている場でもあるんです。普段都会の競争社会に生きている我々は、人間本来がもつ諸々の感情を封じこめて生活しているのが現状。肉体と精神の在り方を考え直す作業を行うには自然の中に身体を投げ出すことが、最も有効と考えたから」と、リーダーの大須賀勇氏は語ってくれた。8月15日～31日までの17日間のプログラムは、各種体操、呼吸方、歩行などの舞踏の基礎の他、自然鑑賞、文学身体論、生物行動学から漫画講座、劇場音楽までと盛り沢山。講師陣も飯沢耕太郎、石井聰亙、小林よしのりなど、業種を越えた講師陣の参加が予定されている。これまでのセミナーには学生から大手広告代理店の社員、教師といった幅広い年令と職種の人間が参加。この知の幕の内弁当的セミナーを体験の後、芸術に開眼し、生活や価値観が変わった者も少なくないというのも納得できる。

白虎社はこのセミナーを核に、熊野を芸術家育成や文化交流、はては文化芸術発信の地として発展させる計画があるという。輸入文化を享受するのみに満足できなくなったその時、人は初めて外部にむけての表現が可能となるに違いない。

なお、セミナー参加資格は16歳以上の男女（経験不問）、締切は7月20日と8月12日。詳しいお問い合わせは（075）661・5237まで。

俺らおっさんのファンキーダンスなめんなよ

京都のMr.ソウルマンの現代若者考



⬆「日本人はサル真似は上手いけど、自分から踊りは創れないって、黒人がよくいうんですよ」アキラ氏の目に叶うソウルマンは果たして存在したのか。

⬅ストリート&ソウル・ダンサーの間で、この大会で優勝することがステイタスとされている。

「リズムを感じて自然に体を動かす。僕はダンサーじゃなくて、ソウルマンだと思ってるんですよ」「とんねるずのみなさんのおかげです」の人気コーナー『ソウルトンネルズ』に出演、関西大会で優勝した京都のソウル・シーンをリードする男、渡辺玲氏。関西のクラブ・ディスコの火付け役といわれるニューヨーク52 st.をオープンさせ、現在はP・ファンクバーを経営。その傍ら、司会者も年間20〜30をこなす。その彼が司会するイベント「KYOTO・エグゼクティブ・ダンス・パーティ・ウィズ・ザ・6th・オール・ジャパン・フリーダンス・コンテスト」が、6月21日ジェイプカンパニーの主催によりマハラジャ祇園にて行われた。学生を中心に約1、500人を動員した大規模なパーティである。ゲストにはテディ団やLLブラザーズを育てた横田義和を迎え全国から総勢40組のつわものどもがコンテストにエントリー。ブームも拍車をかけ大盛況であった。「マスコミ攻勢によってもたらされたダンス・ブームは、技術やファッション先行のダンサーを増やしたに過ぎない。今の若い子の踊りは確かに上手いけどスピリッツが足りない。僕らが昔、ペンドールやカルチェラタンで培ったソウル魂を彼らにも持って欲しい。まあ5・6年は踊り続けなあかんけど」彼は70年代のソウル魂を伝えることに余念がない。それは、イベントを見守る目差しに込められているようだった。

ライター　江川　正晃